アカイエカとスジアシイエカの分類 学的及び衛生害虫学的考察

加藤陸奥雄 松田 達郎

Katô, M. & Matsuda, T.: Taxonomical
and ecological notes on *Culex pipiens*
and *Culex vagans*

アカイエカとスジアシイエカとは、ごく似かよつた種であるといい、特に幼虫では、これら2種を区別し得ないといわれている。呼吸管毛が多いこと、呼吸管比の大であることがスジアシイエカの特徴とされているようである。われわれは1954年8月、八甲田山酸ヶ湯温泉附近の地上自然溜水から多数のスジアシイエカの幼虫が、少数のエセシナハマダラカ、ハマダラウスカと共存しているのを発見した。この4令幼虫について呼吸管毛を調査すると、かなりの変異のあることを認めた。いま、これからの敘述の都合上、呼吸管毛についての型を示すと、
呼吸管毛: 7対5 5対 5対4 4対 4対3 3対 3対2
型の記号: XW W WV V VP P PO

この中、V型はスジアシイエカ型であり、Pはアカイエカ型である。酸ヶ湯のものは、V型が最も多く、その変異はXWからPにわたっている。更に薦温泉の汚水溝からも、エセシナハマダラカと共にスジアシイエカを発見したが、この場合には、WVからPにわたる変異をもち、V型が最も多いけれども、酸ヶ湯のものにくらべ、P型が有意的に多くなっている。

このような変異の動きは、松島宮島の天然水をまじえる水溝から得られたアカイエカ幼虫の変異へとつづいているようである。即ち、ここでは、PV型が多く、V型P型も見出される。これら3カ所のボーフラの呼吸管比は、5—7を示し、相互の間に有意の差を認め得なかつた。この宮戸島の場合はエセシナハマダラカと共存していた。宮戸島の他の下水溝や、仙台市長町その他の下水溝より得られたアカイエカでは、V型からPO型へまでの変異があるが、VからPO型にひろがっている。これらの場合は、呼吸管比は3.5—4.7位のもので、上記の場合とくらべて小さくなっている。このようなことから、アカイエカとスジアシイエカとが、果して異種であるのか、或いは同種内の変異として考えるべきであるかの分類学的検討を加える必要のあることを提供していると思われる。スジアシイエカと思われるものは、エセシナハマダラカ、ハマダラウスカなどと共に棲息し、自然の地上溜水か、あるいは天然水をも含む地上溜水かに発見され、アカイエカが常に人工的な汚水や汚水溝にだけ発見されるということは、種々の分化に重要な暗示を与

え、更に害虫化の問題に多くの示唆を与えるものと考えられる。

(東北大学・理学部生物学教室)

室内飼育に於けるクロバエ族の 越夏態度に就て

渡 辺 清

Watanabe, K.: On the overwintering
of Tribe Calliphorini, observations
in the laboratory rearing

クロバエ族は前蛹期又は蛹で土中に於て越夏すると云われている。私は既報(近畿支部第9回大会)の様に2種のクロバエ即ちケブカクロバエ、フタオクロバエを狭所に於て室内累代飼育する事に成功したので本飼育法により、此等2種の蠅を室温の下に養い、成虫の寿命、雌の産卵能力、幼虫の孵化率、蛹化率、羽化率等についてその越夏の様相を観察した。成虫は最も長く生存したものがケブカクロバエでは114日、フタオクロバエでは113日、その平均寿命は世代を経る毎に、即ち夏季に近づくに従つて短縮し、8月に生存していた成虫はケブカクロバエにては4代の(2)の5匹、フタオクロバエにては5代の(1)の1匹、(3)の4匹のみであり、而も其等両種共に8月上旬には死滅し、高温がこれ等成虫の生活には適さない事を示した。雌の産卵能力はフタオクロバエに於ては夏季に近づくに従つてその平均産卵数は減少し、産卵期間は短縮し、その産卵能力の減退を示しているが、ケブカクロバエは夏季に近づくに従い平均産卵数増加し、その産卵期間には著明な変化が認められなかつた。卵の孵化率、幼虫の蛹化率、蛹の羽化率は両種共夏季に近づくに従い低下し、特にケブカクロバエ5代の蛹は羽化せず、フタオクロバエは5代の成虫の交尾を見たのであるが6代の卵は孵化せずに死滅した。以上の結果より最初35°Cの実験室内で既報の如き飼育法にてはケブカクロバエ、フタオクロバエ共に越夏する事が出来なかつた。而し本実験により養われた前蛹期・蛹は僅か約1cmの湿気を含んだ砂中にあり、自然とは条件が異つている様に思われる。この点今後更に検討する必要がある。

(京都府医大・医動物)